Title	北村透谷の政治的バイロン熱 ：「虚榮村の住民」「兆民居士安くにかある」におけるバイロンへの論及を中心に
Author(s)	菊池, 有希
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 274-313
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4940
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

北村透谷の政治的バイロン熱

――「虚榮村の住民」「兆民居士安くにかある」におけるバイロンへの論及を中心に

菊池有希

はじめに

北村透谷がバイロンの「負のロマン主義」（Negative Romanticism）[1]に強く共鳴し、それを自身の作品世界の中に様々なかたちで受容していたことはよく知られている。透谷は、バイロンの「負のロマン主義」の気分が最も濃厚に表れた作品と言える『マンフレッド』*Manfred*（一八一七年）を特に読み込み、それを下敷きにして劇詩『蓬莱曲』（明治二四年）を書き、またその他の作品においてその一部イメージを積極的に摂取・引用したのであった。[2]透谷にとってバイロンとは、まずもって厭世と懐疑と絶望の詩人、透谷流の言葉で言えば「厭世詩家」（「厭世詩家と女性」、『女學雜誌』第三〇三號・第三〇五號、明治二五年二月）の代表格であり、透谷はこのような内向性の軸に傾いたバイロン観を、またそれに基づくバイロン像を、バイロンの「負のロマン主義」への心酔（＝厭世的バイロン熱）を深めてゆく中で固定化させていったのである。[3]

しかしながら透谷は、単にバイロンを、自己と世界との間にある深淵を前に悲観し内向する厭世的自我詩人としての

み見ていたわけではなかった。透谷にとってのバイロンが、「厭世詩家」の相貌を色濃く持っていたことそれ自体は間違いないことであるが、「厭世詩家と女性」以降の透谷のバイロン言説を検討してみると、透谷がバイロンの別の面をも見据えていたことがわかる。つまり、自己と世界との間にある深淵を前にただ内向するのではなく、世界に対して決然とした態度を取るバイロンの外向的な面にも注意を払っていた節が看取されるのである。

透谷が見据えていたバイロンのこの外向的な面は、現実世界の具体的な状況の只中に果敢に自己を投げ出してゆくバイロンの政治的な面に連なってゆくものである。バイロンのこの政治的な面については、明治十年代中頃から明治二十年代初頭にかけての時期、東海散士、中江兆民、徳冨蘇峰、長澤別天など、政治的意識・社会的意識を鋭く持った様々な思想的立場の言論人が注意を払っていたところのものであった。[4] 透谷の言論活動が本格化するのは明治二十年代半ば以降であるから、彼らがバイロンに論及していた時期とは若干のずれがある。だが透谷は、明治十年代半ばから後半にかけての時期、いまだ言論活動を開始してはいなかったものの、自由民権運動の盛り上がりを背景とした当時の政治熱に感化され、年少の身ながら民権壮士らと積極的に交わるなど、政治的意識の強度という点では彼ら先輩格の言論人に勝るとも劣るものではなかった。しかも透谷の政治への関心は、笹渕友一が戸川秋骨、巖本善治ら同時代人の証言を引きながら指摘しているように、透谷の生涯全体に亘るものだったのである。[5]

透谷における政治的意識とそのバイロン観との関わりの問題については、例えば笹渕友一が、民権壮士の首領を主人公とした物語詩『楚囚之詩』（明治二二年）がバイロンの物語詩『ションの囚人』*The Prisoner of Chillon*（一八一六年）に大きく依拠しているという事実に、透谷自身の政治的・社会的・倫理的意識に基づく、自由解放の英雄詩人としてのバイロンへの関心の表れを読み取っている。[6] また、吉武好孝も笹渕と同様の見方を示し、[7] 自由民権運動家としての透谷の「革命児の情熱に火をつけ燃え立せた英米の作家たちが、エマソン、バイロンらだった」と述べつつ、透谷の急進的な政治的意識とバイロンのそれとの交感の可能性について論じている。[8] この笹渕、吉武の両者とも、『楚囚之詩』執筆

時、透谷の中で政治的意識がなお強くあったという前提に立ち、その上で、バイロンの外向的な面と透谷の外向的な面とが共鳴した結果『楚囚之詩』が物されたのだ、と解釈しているわけである。

だが一方で、この点に関して、笹渕や吉武とは逆の見解も提出されている。例えば佐藤善也は、キリスト教に基づく透谷の自由主義の精神と、キリスト教に反抗的だったバイロンの自由主義の精神とは同列に論じることはできない、とした上で、『楚囚之詩』執筆時、透谷はバイロンの政治的な面に対して関心を抱いていなかった、と論じている。(9) つまり、『楚囚之詩』における『シヨンの囚人』受容がバイロンの政治的な面に対する関心に基づいてなされたものであるか否かについては、論者の間でいまなお大きな見解の相違があり、一定の同意がいまだ得られていないというのが実状なのである。

この『楚囚之詩』における『シヨンの囚人』受容の問題については、『シヨンの囚人』それ自体にバイロンの政治的な面がどの程度表現されているかという問題も含め、総合的な検討を要するものであり、別に稿を起こさねばならない。故に、本稿においては、バイロンの政治的な面が直截に表現された詩句やエピソードに焦点を絞り、透谷がそれにどのように反応したのかを中心に検討していくことにする。そうすることで、これまで『楚囚之詩』における『シヨンの囚人』受容の問題を絡めることで却って見えにくくなってしまっていた、バイロンの政治的な面に対する透谷の関心のありようをより明瞭に浮き彫りにすることができ、またそのことを通して、あり得べき透谷の政治的バイロン熱の内実に肉迫することが可能となると考えるからである。

一、「虚榮村の住民」におけるバイロンへの論及

バイロンの政治的な面に対する透谷の関心について考察する際、まず注目されるのが、明治二五年一一月、『平和』第八號に発表された「虚榮村の住民」という小文である。この小文の内容は、「人間の一大弱性は實に虚榮を追求するに於て存す」という一文が示す通り、戦争を始めとする諸悪の根源としての人間の虚栄心一般を弾劾するというもので、全体の論旨それ自体としては他愛ない内容のものである。ただこの小文の中にバイロンに関係する次のようなくだりがあることが注意される。

> バイロン、拿翁（なぽれおん）を罵つて空しき罪深き榮譽の奴隷なりと言へり。又た當時の佛民（ふらんすじん）を嘲つて、彼等の呼吸は騒擾なり、彼等の生涯は暴風雨なり、その風波の上をわたりて遂には沈溺すべきものなりと言へり。ひとり拿翁のみならず。ひとり佛民（ふつみん）のみならず。人間根底の痼疾の一は、その虚榮に溺るゝ性質なり。[10]（一九六頁）

ここで透谷は、人間の心の奥底に潜む虚栄心がいかに罪深く災いをもたらすものなのかを語るため、「拿翁」即ちナポレオンに対するバイロンの批判の言と、「當時の佛民」即ち第一帝政期のフランス国民に対するバイロンの批判の言とを引用している。「虚榮村の住民」は、メソジスト派の下谷教会を中心として発足した日本平和会の機関誌で透谷が主筆を務めていた雑誌『平和』に発表されたものであるわけだが、[11]そのようなキリスト教系の雑誌媒体にも拘らず、透

谷が持論を展開するためにここでわざわざ「悪魔派」（Satanic School）の詩人バイロンの言に裏付けを求めていることにまず注意を引かれる。[12] 他にも『平和』に載せた文章としては、「眞―對―失意」（『平和』第四號、明治二五年七月）において、「智識こそかなしきものなれ／と揚言したるバイロンの中に幾多の傲負ありとして之を算去すともこの詞を否むはいかに」と、『マンフレッド』中の詩句を[13]バイロンの言としつつ自身の主張の裏付けにするということをしており、この「虚榮村の住民」におけるバイロンへの論及なども、バイロンを読み込んでいた透谷の面目躍如といったところであると言えよう。

では、早速具体的に「虚榮村の住民」において引用されたバイロンの言について検討していこう。「虚榮村の住民」における透谷のバイロンへの論及の前半のくだり、即ち「バイロン、拿翁を罵つて空しき罪深き榮譽の奴隷なりと言へり」という文の典拠は何か。この場合、いくつかの可能性を考えることができる。まず考えられるのが、『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌 *Childe Harold's Pilgrimage* Canto III（一八一六年）の第三七節の中の次のくだりである。

Conqueror and captive of the earth art thou!
She trembles at thee still, and thy wild name
Was ne'er more bruited in men's minds than now
That thou art nothing, save the jest of Fame,[14] (*CPW*, vol.2, 90.)

汝、地上を征服せし者にして、地上に囚われたる者よ！
大地はいまなお汝のために鳴動し、汝の荒々しき名は
今ほど人々の心に鳴り響いていることはなかった、

汝が他でもない、「栄誉」によって嘲られるものとなってしまっている今ほどには。

このくだりは、「地上を征服せし者にして、地上に囚われたる者」、即ち、一時はヨーロッパ各国を征服しながら今や没落した敗残者としてセントヘレナ島に幽閉されているナポレオンに、バイロンが呼びかけている一節である。バイロンは、英雄としての偉大さと俗人としての卑小さがともに極端だったナポレオンに対して愛憎入り混じる複雑な思いを抱いており、その両義的な思いを幾度か書簡や詩の中で表現しているのだが、ここで引用したくだりは、ナポレオンに対する批判意識がやや勝った箇所と言うことができるであろう。バイロンはここで、野心や征服欲といった俗情に駆られてヨーロッパ各国の自由を簒奪し、その挙句に結局は自身の個人的な自由さえ失って囚われの身になり下がってしまった、卑小な専制者としてのナポレオンを冷ややかに批判している。つまりバイロンは、ナポレオンを、野心や征服欲といった万人に共通する卑小な俗情を偉大と見紛うばかりに肥大化させ、結果身を滅ぼしてしまった哀れな存在として、その傑出性・英雄性は認めつつも批判的に見るということをしているのである。

この箇所のバイロンの詩句において特に透谷の注意を引いたと思われるのが、ナポレオンに対するバイロンの批判的な眼差しが最もよく表れている「「栄誉」によって嘲られるもの」(the jest of Fame) という表現である。これは、「栄誉」に目が眩んだナポレオンを、「栄誉」それ自体に嘲笑され弄ばれるだけの卑小な存在として捉えるという、バイロン一流の皮肉が効いた辛辣な表現である。恐らく透谷は、ナポレオンの卑小さに対するバイロンの批判的な眼差しを、この皮肉な言の中にありありと感受したのであろう。そしてそれを、「虚榮村の住民」において「榮譽の奴隷」という一言で引き継ぎ、「バイロン、拿翁を罵つて空しき罪深き榮譽の奴隷なりと言へり」というかたちで、バイロンのナポレオン批判の内容を自己流に要約したのであろう、と推測される。

あるいはまた、このくだりの典拠としては別の可能性も考えられる。「虚榮村の住民」という表題の「虚榮」とい

う語に力点を置くなら、やはりナポレオンのことを批判的に述べた、『チャイルド・ハロルドの巡礼』第四歌 *Childe Harold's Pilgrimage* Canto IV（一八一九年）の第八九節の次の詩行も典拠の可能性の一つとして数えることができるように思われる。

Save one vain man, who is not in the grave,
But, vanquish'd by himself, to his own slaves a slave—（*CPW*, vol.2, 154.）

一人の虚栄心の強い男、今はまだ墓の中にいないが、
自分自身に負け、自分の奴隷のそのまた奴隷にまでなり下がった一人の男を除いて。

この箇所も、帝王の座を剥奪されただけに止まらずセントヘレナ島に島流しに遭い幽閉の身にまで没落してしまったナポレオンに対して皮肉な眼差しを向けたくだりの中の一節であり、先に引用した『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌第三七節の詩句と同様の趣旨のものである。この箇所の詩句を、「（ナポレオンは）自分自身（の虚栄心）に負け、（虚栄心の奴隷になった結果）自分の奴隷のそのまた奴隷にまでなり下がった」というふうに言葉を補って解釈すると、透谷の「バイロン、拿翁を罵つて空しき罪深き榮譽の奴隷なりと言へり」という文の意味内容にかなり近いものとなる。また表題の「虚榮」のみならず、「奴隷」（slave）という語がはっきり出ている点も、透谷文との親近性を感じさせるものである。

さらにこの箇所の二節後の、ナポレオン批判の文脈を引き継いだ第九一節の次の詩行も、透谷の表現との関係で注意される。

With but one weakest weakness—vanity,
Coquettish in ambition—still he aim'd—
At what? Can he avouch—or answer what he claim'd?（*CPW*, vol.2, 154.）

ただ一つ彼には弱点中の弱点である虚栄心があった。
野心に媚びへつらい、なおも彼は何かを目論んでいた。
だが何を？　彼は断言、あるいは答えることができるであろうか、自分が求めたものが何であるかを。

この第九一節の詩句についても、「野心に媚びへつらい」（Coquettish in ambition）という詩句を、ナポレオンが「栄譽」を追求する野心に奴隷のように卑屈な態度を取っていた、と意訳すれば、透谷文の意味内容とかなり似通ったものとなる。この『チャイルド・ハロルドの巡礼』第四歌第八九節及び第九一節におけるナポレオン批判の詩行は、いずれも「虚栄」にまつわる語、即ち vain や vanity といったキーワードを含んでおり、それだけに「虚栄村の住民」の主題との強い関連を示唆するものである。これらの詩行は、第八九節及び第九一節と、互いに非常に近い位置にあり、透谷はこれらの詩行を一連の文脈で捉えつつ、両方の意を汲みながら「バイロン、拿翁を罵つて空しき罪深き榮譽の奴隷なりと言へり」と書いたのではないか、と考えることができるのである。

「虚榮村の住民」から引用したバイロン論及の文の前半部の典拠については、以上の可能性が考えられるわけだが、では後半部のくだり、即ち「當時の佛民を嘲つて、彼等の呼吸は騒擾なり、彼等の生涯は暴風雨なり、その風波の上をわたりて遂には沈溺すべきものなりと言へり」の典拠についてはどうであろうか。この文については、実ははっきりと

典拠を特定することができる。即ち、この文の典拠は『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌第四四節中の次の詩行である。

Their breath is agitation, and their life
A storm whereon they ride, to sink at last,（*CPW*, vol.2, 92.）

彼らの息遣いは、人々を扇動するものである。そして彼らの人生は
彼らがその上に乗る一陣の暴風であり、やがて止むべきものである。

この詩行も、やはりナポレオンの栄枯盛衰について歌った文脈の中の一節であり、ナポレオン批判からナポレオンに熱狂した第一帝政期のフランス国民批判にまで話題を展開したくだりの詩行である。バイロンはここで、ナポレオンと同様、俗情に煽られるがままだった当時のフランス国民（特に知識人層）の暴走を痛烈に批判しているわけだが、一読してわかる通り、透谷の「彼等の呼吸は騒擾なり」以下の文は、バイロンのこの詩行をほぼそのまま直訳したものとなっている。しかも、この詩句の直ぐ前の第四三節においては、フランス国民のナポレオンに対する熱狂を支えた「栄誉欲あるいは支配欲」（the lust to shine or rule）がいかに危険なものであるか、という内容が歌われており、恐らく透谷は、この直前の詩節の内容をも踏まえながら、フランス国民の「栄誉欲あるいは支配欲」即ち俗悪な虚栄心を批判する詩行を引用したのだと推測される。

以上のことから、透谷が「虚榮村の住民」を書く際、『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌及び第四歌のナポレオン批判の文脈のくだりを参照していたであろうことがわかる。そして興味深いことに、透谷が論及し引用しているバイ

ロンの詩句はいずれも、ナポレオン戦争前後の時期のヨーロッパの国際的な政治状況を踏まえつつ、現実政治の中で俗悪な虚栄心がいかに人々の精神を堕落させ暴走させるか、というモチーフについて歌ったくだりの一節であるわけであった。このことは換言すれば、虚栄心などの俗情と結託した権力意志の危険について歌ったくだりに透谷が非常な関心を示していたということが「虚榮村の住民」におけるバイロンへの論及から窺い知られるということである。

このことの意味をより精確に探るため、ここまでの議論の中で透谷文の典拠と推定された詩行の周辺の詩節も含め、バイロンが一連のくだりにおいて何を語ろうとしていたのかについて、さらに詳しく辿ってみたい。まずは、『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌第三七節と第四四節の詩行から見てみよう。この箇所は、バイロンがワーテルロー滞在時の感慨を歌ったくだりの一節であるわけだが、この前後の詩節でバイロンは、戦争で荒廃したワーテルローの風景と、敗北し没落したナポレオンの運命とを重ねつつ、栄光を約束されていたはずのナポレオンの挫折の原因を、ナポレオンがあまりにもあからさまに人々を見下して人々の憎悪を招いたということに求めている。つまりバイロンは、ナポレオンの中で、高慢さ・傲慢さという俗情と権力意志とが結びついてしまったことが、他者にとってもナポレオン自身にとっても不幸な結果を生んでしまったのだ、と歌っているわけである。

また、透谷文の典拠の可能性として推定されたもう一つの箇所、『チャイルド・ハロルドの巡礼』第四歌第八九節と第九一節の詩行についても、これと同様のことが言える。この箇所は、ローマを訪れたバイロンが、ローマ帝国の遺跡や廃墟を前に過去の栄光の時代を偲びつつ、現在のローマの没落を嘆いたくだりの中の一節であるわけだが、これらもまた、ナポレオンにおける世俗的権力意志の無残な結末について歌ったくだりの一節であった。ナポレオンは、オーストリア帝国からのイタリア全体の解放者であり、ローマ帝国の栄光を現代に復活させる英雄のはずであったのだが、結局ナポレオンは、世俗的権力意志の虜になってイタリアに対する新たな専制的支配者になり下がり、結局最後には自身が倒したはずの旧体制の勢力によって歴史の表舞台から葬り去られることになってしまった――。このように古代ロー

マ帝国の栄光と没落と、英雄ナポレオンの栄光と没落とを重ね合わせながら、世俗的権力意志が必ず辿る没落の運命について歌っているのが、透谷が参照した可能性のある『チャイルド・ハロルドの巡礼』第四歌の第九〇節前後のくだりということになるわけである。

このように、透谷が参照したと思しきバイロンの詩行は、フランス革命からナポレオン戦争を経てウィーン体制へと至るヨーロッパの政治史の現象面での動きと、その裏面でうごめく、栄枯盛衰の原因としての世俗的権力意志という本質的な問題とを両方見て取るバイロンの複眼的な眼差しを強く感じさせる詩節の中のものであるわけであった。バイロンは、『チャイルド・ハロルドの巡礼』において、ヨーロッパの政治史の中の栄枯盛衰の裏面には虚栄心を始めとする俗情と権力意志の結託の問題があるという認識を繰り返し歌っていたわけだが、透谷が、まさに虚栄心批判を主題とする「虚榮村の住民」という小文において、バイロンの政治史を見据える眼差しが濃厚に表れている『チャイルド・ハロルドの巡礼』の詩句を引用するということをしたのは、透谷がバイロンのこのような政治的・外向的な眼差し、認識のあり方に共感を逞しくしていたからであろう。つまり、「虚榮村の住民」におけるバイロンへの論及から示唆されるのは、「厭世詩家と女性」などで描き出した内向的な厭世的自我詩人としてのバイロン像の他に、ヨーロッパ政治史の表層と深層とを冷ややかな複眼で見据える、冷静で批評的なバイロンというもう一つのバイロン像が透谷の中にあった、ということなのである。

二、北村透谷のアーノルド的バイロン像の受容

俗情と権力意志の結託の問題に着目し、その視点からヨーロッパ政治史の流れ、特にナポレオン戦争期の政治状況を

批評的に見据えるバイロン――。「厭世詩家と女性」以降、透谷が「虚榮村の住民」という小文において僅かではあるが仄めかしたこのようなバイロン像は、同時代の他の言論人のバイロン像と比較しても独特と言えるものであった。

バイロンと当時のヨーロッパ政治の動きとの関連を示唆したバイロン論及としては、例えば「佛國革命の風雲延いてバイロンを生したるか如き」云々と書いた徳冨蘇峰の「新日本の詩人」（『國民之友』第三巻第二八號、明治二一年八月、傍線ママ）などが挙げられる。だがこれなどは、単にフランス革命時の自由主義の気運がバイロンの自由主義の精神を育んだという認識を述べているに止まっており、透谷のように、ヨーロッパにおける政治状況のありようを心理的にやや距離を取った地点から批評的に眺めるバイロンの姿を捉えたものではなかった。ましてや、自由を尊重すべき理念の一つとして掲げたフランス革命が自由を抑圧する恐怖政治を招来してしまい、その挙句に他国の自由を抑圧するナポレオンを登場させるに至るという、自由主義の興隆ではなく没落の過程をバイロンが批評的に見ていたという認識は、単に自由主義の詩人としてのみバイロンを見ていたであろう蘇峰には恐らく無縁のものだったに違いない。また、「虚榮村の住民」の発表時期に近いところで言えば、「虚榮村の住民」の約半年後に発表された十州山人の筆になる評論「バイロン卿」（『この花草紙』第二巻、明治二六年六月）におけるバイロン像も、透谷が仄めかしたバイロン像とは異なるものであった。十州山人の「バイロン卿」における、バイロンとヨーロッパ政治の動きとの関わりについての記述は以下の如くである。

> 蓋し當時英國の社會は非佛國の氣焰殊に高く之を以て道義と自由との爲めに盡すものなりとせりき。故に苟も自由の主義を公言するものあらんか社會主義の煽動者とも見做されんず勢なりき。感情的なるバイロン之を見ていかで堪ゆるを得んや。忽ちに厭世の傾向を生じ社會を嘲て自然を賛へ懐疑派を愛するに至りぬ。この感情こそ實にバイロンを驅て社會反動の主動者たらしめたるものと云ふべけれ。(15)

ここでは、フランス革命時に蔓延した自由主義の気運にイギリスが反発し、そのようなイギリス社会に対して自由主義の見地からバイロンが反逆したということが言われる中で、バイロンを「感情的なる」「社會反動の主動者」として見る見方が披露されている。ここにあるのは、やはり蘇峰の場合と同様、バイロンを、フランス革命の自由主義の気運に乗じた直情径行の自由主義詩人と見る素朴なバイロン観であり、バイロンにおける「感情的」ならぬ批評的な精神を見据える透谷の見方とは異質なものであった。

では、透谷のこのような独特とも言えるバイロン観の淵源はどこにあったのであろうか。ここで注目されるのが、マシュー・アーノルドの『批評集』*Essays in Criticism*（一八六五年）の中に収められた「バイロン論」"Byron"との関連である。この「バイロン論」の中でアーノルドは、バイロンを他の詩人と比して傑出した存在たらしめているのはバイロンの「人格」（personality）であり、バイロンの様々な欠点を補って余りある彼のその「人格」の中核には「卓越した誠実さと強さ」（the excellence of sincerity and strength）が息づいている、といった主旨の議論を展開している。では、バイロンの「人格」の核をなしているとされる「卓越した誠実さと強さ」とは一体どのようなものであり、かつそれは具体的にどのようなかたちで表れているものであるのか。アーノルドによれば、バイロンにあってそれはイギリス人の俗物主義（the British Philistinism）に対する激しい嫌悪というかたちで表れている。アーノルドは言う。バイロンは貴族であったから下層階級のイギリス人の俗物主義を嫌ったことそれ自体はさして不思議ではない。だが大事なのは、バイロンが下層階級の俗物主義のみならず上層階級の俗物主義をも激しく嫌悪していたことである。バイロンは、一見すると俗物主義を毛嫌いしているように見えながらその実自ら俗物主義に染まっているイギリスの上層階級の俗物ぶりを激しく毛嫌いしていたのである――。こう述べた上で、アーノルドはさらに次のように文章を続ける。

The falsehood, cynicism, insolence, misgoverment, oppression, with their consequent unfailing crop of human misery, which were produced by this state of things, roused Byron to irreconcilable revolt and battle. They made him indignant, they infuriated him; they were so strong, so defiant, so maleficent,—and yet he felt that they were doomed. 'You have seen every trampler down in turn,' he comforts himself with saying, 'from Buonaparte to the simplest individuals.' The old order, as after 1815 it stood victorious, with its ignorance and misery below, its cant, selfishness, and cynicism above, was at home and abroad equally hateful to him. 'I have simplified my politics,' he writes, 'into an utter detestation of all existing governments.' And again: 'Give me a republic. The king-times are fast finishing; there will be blood shed like water and tears like mist, but the peoples will conquer in the end. I shall not live to see it, but I foresee it.'(232–233)[16]

嘘偽り、冷笑、尊大さ、失政、抑圧、これらは、結果として必ずもたらされることになる人間の不幸を伴うものであり、物事のこうした状態によって生み出されたものであるわけだが、これらのことがバイロンを断固とした反逆と闘争に駆り立てたのである。これらが、彼を憤慨させ、激昂させたのであった。これらは、非常に強固なものであり、非常に挑発的であり、非常に有害なものであった。だが、彼は、これらがいずれ破滅する運命にあることを感じてもいた。「どんな圧政者も、順繰りに没落の憂き目を見ることになる」彼は、このように言って、自分を慰めてもいたのである。「ボナパルトから取るに足らない有象無象まで」。旧体制は、一八一五年以降、下層階級の無知と苦痛、また上層階級の偽善と利己心と冷笑の手助けで華々しく成立したわけであったが、それは本国のであれ、他国のであれ、彼にとっては等しく憎むべきものであった。「私は自分の政治学を」と彼は書いている。「ありとあらゆる現存の政府に対する全き嫌悪という一言に

要約できる」。そしてまた次のようにも書いている。「我に共和政体を与えたまえ。王政時代は、もう間もなく終焉しつつある。人々の血が水のように流され、人々の涙が霧雨のように流されることになるのだろうが、諸国民は最終的には勝利を収めるであろう。私は生存中、それを目にすることはできないが、それを予見している」。

アーノルドはこのように、バイロンが下層階級のみならず上層階級にも蔓延しているイギリス的俗物主義全体に対して反旗を翻したところにバイロンの「卓越した誠実さと強さ」の証左を見、バイロンの「人格」の高潔さを称賛するということをしているわけである。ここで透谷のバイロン観との関連において注意されるのが、アーノルドの右の如き議論が圧政者批判や旧体制批判というかたちで表明されたバイロンの政治的な見解に注目しつつ展開されているという点である。まずアーノルドは、「ボナパルト」云々という文句からわかるように、栄光の絶頂から没落したナポレオンの運命を踏まえたバイロンの圧政者没落必然論を取り上げている。そして次に、「一八一五年以降」、即ちウィーン体制以降の旧体制の復活という事態を、大衆の無知と苦痛の上に胡坐をかいて偽善と利己心と冷笑を弄ぶ支配階級の俗物主義の勝利の結果として捉え、それに激しく反発するバイロンの言葉を取り上げている。つまりアーノルドはこの文章全体の文脈において、バイロンがナポレオンの没落からウィーン体制の成立に至るヨーロッパ政治史の展開の底流に支配階級の俗物主義の問題があることを正しく見抜いていること、のみならずそれを憎悪するだけの「卓越した誠実さと強さ」を持っていること、そういったことが彼の「人格」を極めて高潔なものたらしめているのだ、と言っているのである。アーノルドがここで描き出しているバイロン像は、ヨーロッパ政治史における支配階級の俗物主義を撃つ「人格」高潔なバイロン、「卓越した誠実さと強さ」によって俗情と権力意志の結託の問題を直視する批評的なバイロンというものであり、これは、透谷が「虚榮村の住民」において仄めかしたバイロン像と非常に親近性のあるものと言える。

透谷がアーノルドの「バイロン論」を繙いたという証拠は、明治二六年四月及び五月の『評論』に連載された「日本文學史骨」の中に見つけることができる。その「第一回　快樂と實用」の項には、アーノルドの言葉が二つ引用されているが、そのうちの一つ、「アーノルドの言ふ如く、人生の批評としての詩は又た詩の理と詩の美とを兼ねざるべからず」とあるのは、笹渕友一が指摘する通り、『批評集』の中の、「しかしながら、詩においては、人生の批評は、詩的な真実と詩的な美の両方の法則に従順に従ってなされるべきものである」(In poetry, however, the criticism of life has to be made conformably to the laws of poetic truth and poetic beauty.) の意訳と見なすことができるものであり、[17] またこの一文は、佐藤善也が指摘するように、アーノルドの『批評集』に収められた「バイロン論」の中にあるものである。[18] このような事実から、透谷がアーノルドの「バイロン論」を読んでいたことはまずは確実であると言える。

では、いつ透谷がこのアーノルドの「バイロン論」を読んでいたか、という点についてであるが、この点に関して佐藤善也は、「バイロンは透谷にとって早くから親しみ深い名である。アーノルドの「バイロン論」にも恐らく目を通していたであろうことは十分あり得ることである」としながら、その時期については、透谷のアーノルドに示唆を受けたと思しき文章が「二十六年の人生相渉論争の時期に集中していること」を論拠として挙げつつ、「(「日本文學史骨」に引用したアーノルドの文が記憶に強く残るとすれば) 二十二・三年や二十四・五年よりも二十六年にはいってからの方が、その可能性が大きいのではないか」と述べている。[19] だが一方で佐藤は、「二十三・四年に集中する」という『日本評論』掲載の各種記事のアーノルド引用に透谷が反応していた可能性についても触れ、アーノルドのバイロン評を引用している植村正久の「厭世の詩人ロード、バイロン」(『日本評論』第二六號、明治二四年三月) を透谷が強い関心を持って読み、「その時、アーノルドのバイロン評に興味をそそられたかもしれず、あるいはそれを機にアーノルドの「バイロン論」を読んでみようと思い、もしかすると実際に手をとって繙読したかもしれない」とも述べている。[20] このように、透谷がアーノルドの「バイロン論」を読んだ時期を特定する客観的な証拠はいまだ提示されておらず、これに

ついては推測するしかないのであるが、植村の「厭世の詩人ロード、バイロン」が透谷の未完のバイロン論「マンフレッド及びフオースト」に色濃い影を落としていると考えられることや[21]、透谷のバイロンへの論及が晩年の文章にまで見られることなどを考慮すると、明治二四年頃、透谷が植村の「厭世の詩人ロード、バイロン」に刺激されるかたちで、そこに引用されていたアーノルドの「バイロン論」にまで手を伸ばしたという可能性が高いように思われる。そしてそれ以来、透谷が論じる対象としてのバイロンのみならず、論者としてのアーノルドにも強く関心を抱くようになり、明治二六年前後の時期からの人生相渉論争を背景にいっそうアーノルドへの関心を強めてゆく中で、旧知のその「バイロン論」のことを改めて想起した、ということは十分あり得ることであろう。明治二二年の『楚囚之詩』の執筆以来、折に触れバイロン作品を受容し頻繁にバイロンに論及してきた透谷であってみれば、人生相渉論争時に顕在化してきたアーノルドへの関心と、従来からあるバイロンへの関心とが交わる地点にアーノルドの「バイロン論」を想起したと考えることは、むしろ自然な推論だと言える。

このように見てくると、先に引用した、アーノルドが「卓越した誠実さと強さ」を持った高潔な「人格」のバイロン像の内実を具体的に描き出そうとして、ヨーロッパ政治における支配階級の俗物主義に対するバイロンの激しい嫌悪について力を込めて論じているくだりが、明治二六年前後の時期に再び透谷を刺激したということは十分あり得ることのように思われる。透谷は、このくだりに表現されたアーノルドのバイロン観に強く共鳴、感銘を新たにし、その後改めてこのアーノルドのバイロン観に則ってバイロン詩を読み直した結果、それまで読み過ごしていた、ヨーロッパ政治史において俗物主義的権力意志が自由主義の精神をいかに堕落させてきたかという問題を扱った『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌及び第四歌中の詩節に、新たな意味合いを見出すに至ったのではないか。そして新たに見出したそれらの詩節に、アーノルドが言うところの「卓越した誠実さと強さ」に裏打ちされたバイロンの高潔な「人格」の表現を見て取り、そのような高潔な「人格」のバイロンの眼差しに自身のそれを重ねながら、諸悪の根源としての「虚栄」とい

う俗情を撃った小文「虚榮村の住民」を書いたのではないか――。つまり、「虚榮村の住民」におけるバイロンへの論及は、アーノルドが描き出した、俗物主義を憎むバイロンというバイロン像に透谷が共鳴しそれを受容していたことを示す痕跡の一つであったと推定されるのである。[22]

このようなアーノルドによるバイロン像に対する透谷の共鳴の基盤はそもそも何であったのか。バイロンそれ自体に対する関心というのは言わずもがなのことであるが、同時にそこには、俗情と結託した権力意志一般に対する批判意識というのも確実にあったと思われる。この世俗的権力意志に対する問題意識は、透谷にあって、かなり早い時期から芽生えていたものであった。そのことを示す格好の資料が明治二〇年八月一八日付石坂ミナ宛書簡である。透谷はこのミナ宛書簡の中で、直接政治から恋愛・キリスト教・文学へと赴こうとする自身の半生の軌跡を物語るということをしているわけだが、その内容を一言で言えば、少年透谷の「アンビション」をめぐる精神の遍歴史とでも言うべきものであった。この書簡の中で透谷は、自身の自由民権運動への関与が世俗的権力に対する過剰な野心＝「アンビション」に根差しており、民権運動から足を洗い政治的実践から離れて初めて自分はそのような政治的妄執としての「アンビション」の「妄想」から醒めることができた、といった趣旨のことを語っている。つまり、世俗的権力への「アンビション」と、恋愛・キリスト教・文学とを対立的に捉えた上で、前者（及びそれに囚われていた過去の自分）を否定的に、後者（及びそれらの中に新生の可能性を見出そうとしている現在の自分）を肯定的に物語るということを彼はここで行なっているのである。

このような透谷の〈アンビション―恋愛・キリスト教・文学〉をめぐる認識のありようを端的に示しているのが、この書簡と同時期に書かれたと推定される「夢中の詩人」と題された反古である。これは石坂ミナに宛てた書きかけの書簡の中に断片として書きつけられていたものである。以下に引用する。

斯くして、大山邦造ハ、首尾能く、アンビションの奴隷となり、マンマと驕傲心の、妾となり、或夜の事として、シエーキスピーアの詩集を枕となし、机のわきに假睡の夢、夢中の夢、とも知らぬ身に、文學の女神が、ツヽと立ち、

花より美くしの手を伸ばし、
月より清よらかの眉を光らせ、
邦造邦造と、呼び覺ませば、（二八七―二八八頁、二重傍線ママ）

ここで登場している「首尾能く、アンビションの奴隷となり、マンマと驕傲心の、妾とな」った大山邦造という男は、「アンビション」意識の虜であった、かつての透谷自身の寓意的なイメージと見ることができるであろう。そして、彼を「呼び覺ま」す「文學の女神」とは、「アンビションの奴隷」の状態から自身を覚醒させた、希望としての恋愛（「女」）とキリスト教（「神」）と文学（「文學」）とを渾然一体にしたイメージであると解釈することができる。ここで特に注目されるのが「アンビションの奴隷」という表現である。これはそのまま、先に引用した「虚榮村の住民」における「バイロン、拿翁を罵つて空しき罪深き榮譽の奴隷なりと言へり」という一文の中の「空しき罪深き榮譽の奴隷」という文句を想起させる表現である。透谷の自己批判の表現としての「アンビションの奴隷」という文句と、「虚榮村の住民」におけるバイロンのナポレオン批判の表現としての「空しき罪深き榮譽の奴隷」いう文句――。これら二つを重ね合わせて考えてみた時、「虚榮村の住民」におけるバイロンのナポレオン批判の詩句の引用に、世俗的権力意志の虜であったかつての自己に対する透谷の自己批判の意識を見て取ることも不可能ではないように思われる。

ここで急いで付言しておくと、透谷はこのような世俗的権力への「アンビション」に対する批判の矢を「アンビション」意識に囚われていたかつての自己にのみ向けていたわけではなかった。その批判の矢は、自身と同様、俗情と結

託した権力意志に突き動かされていたらしいかつての同志たち、即ち自由民権運動の壮士たちにも向けられていたのであった。この点については、明治二一年一月二一日付石坂ミナ宛書簡における次の一節に明らかである。

利ハ人情の至性なり、慾ハ社界の流動体なり、利ハ海にして慾ハ陸なり、世の壮士ハ口に利を難し慾を咎むるも、其利の爲めに世を救ハんとするを知らず、慾の爲めに自ら責めらるゝを悟らざるなり、此際に立つて屹然、俗界を脱する基督の兄弟ありて、利の制を設け慾の境を定むるにあらざれば、滔々たる天下の悪弊は、風濤迅雷の猛勢を以て、日本の好天地を破壊し去らんとす、（二九九―三〇〇頁）

ここで透谷は、「世の壮士」、即ち民権壮士たちが私利私欲から世俗的権力を掌中にすることをひたすら求め、政治運動に明け暮れていることを批判している。つまり先の自己批判と同様、俗情に根差した世俗的権力意志への批判意識がここにも明瞭に表れているわけである。そしてこの引用箇所において特に注意したいのが、「滔々たる天下の悪弊は、風濤迅雷の猛勢を以て、日本の好天地を破壊し去らんとす」という一文である。これは、世俗的権力意志に衝き動かされている民権壮士の暴走の危険性を難じた一文であるわけだが、「風濤迅雷の猛勢を以て、日本の好天地を破壊し去らんとす」という表現は、例によって「虚榮村の住民」において引用された、バイロンのフランス革命時のフランス国民を批判した詩句、即ち「彼等の呼吸は騒擾なり、彼等の生涯は暴風雨なり、その風波の上をわたりて遂には沈溺すべきものなりと言へり」という一文との類似を強く感じさせるものである。恐らく透谷自身、「虚榮村の住民」においてこのバイロンの詩句を引用した時、このバイロンの詩句とかつて自身が綴った文との、文脈も含めた類似に思いが至るということもあったであろう。だとすれば、この「虚榮村の住民」におけるバイロンのフランス国民に対する批判の詩句の引用の陰には、透谷の民権壮士に対する批判の意識も息づいていると推定することができるように思われる。

このように、「虚榮村の住民」において引用されたバイロンの詩句と、明治二〇年前後の時期に書かれた透谷の書簡の中の自己批判及び民権壮士批判の表現との間の類似について考えを巡らせてみると、「虚榮村の住民」におけるバイロンへの論及の裏面には、民権運動を離脱して以来の透谷の政治をめぐる問題意識が隠微なかたちで息づいているという仮説が浮かび上がってくる。[23] 先に述べた通り、透谷は「虚榮村の住民」においてバイロンに論及しながら、バイロンの眼差しを通して、ヨーロッパ政治史における世俗的権力意志の問題を見据えていたと考えられるわけだが、この透谷によるバイロンの政治的な眼差しの受容の潜在的な動機としては、恐らく明治日本の実際政治の状況における世俗的権力意志の問題、特に自身が関係した自由民権運動における俗情に根差した世俗的権力意志の問題を見据えたい、ということがあったのではないかと推察される。しかもバイロンが特に見据えていたのは、ルソーらの社会思想を原動力としたフランス革命以降の政治的自由主義の運命であったから、同じくルソーらの社会思想に裏付けを持つ自由民権運動に関わった者たちの心性を批判的に見つめる透谷の問題意識とバイロンのそれとが結びつく必然性は十分あったと考えられるのである。[24]

つまり透谷は、俗情と権力意志とを唯一の動機として実際政治に相渉っている人間、また、過去の自分も含む、そのような動機から政治に相渉ろうとしていた人間に対して、その心性の深層を探り人格的な批判を加えていたわけであった。そして、そのような批判意識を鼓舞しその正当性を透谷に確信させたものこそ、アーノルドが示唆した、権力意志と結びついた俗物主義を激しく憎悪する高潔な人格者としてのバイロン像であり、かつ、アーノルドのそのようなバイロン観を通すことで見出された、ヨーロッパ政治史における権力意志と俗物主義の問題を批評的に見据えるバイロンの詩句であった、と考えられるのである。

三、政治熱とバイロン熱との結合

ここまで、透谷の中で隠微なかたちで持続していた、かつての自身を含む民権壮士の世俗的権力意志の問題にこだわり続けるという意味での政治熱と、アーノルドの描き出すバイロンの「人格」への強い共鳴を基とするバイロン熱とが結合し、その結果として「虚榮村の住民」におけるバイロンへの論及がなされたということを述べてきたわけだが、この両者の結合がよりはっきりしたかたちで示されているのが、明治二六年九月、『評論』第一三號に発表された評論「兆民居士安くにかある」である。

この「兆民居士安くにかある」という評論は、ルソーの社会思想の紹介者であり、かつ自由民権運動のイデオローグであった中江兆民に対する失望と、明治日本の政治的自由主義の運命に対する暗い見通しとを表明した文章である。兆民は、明治二三年の第一回衆議院議員選挙に立候補して当選、政界入りを果たすが、予算審議をめぐる立憲自由党内の混乱に嫌気がさして、翌二四年議員を辞職、その翌年、北海道に渡り実業家として活動するようになる。透谷はこれに激しく失望し、バイロンのルソー評を引用しつつ、次のように書く。

> バイロンの所謂暴野なるルーソー、理想美の夢想家遂に我邦に縁なくして、英國想の代表者、健全なる共和思想の先達なる民友子をして佛學者安くにあると嘲らしむ、時勢の變遷豈に鑑みざるべけんや。（二二〇頁）

ここで透谷は、ルソー思想の紹介者としての兆民が啓蒙思想家としての社会的使命を放棄し、思想の世界から実業の

世界へと後退してしまったことを嘆きつつ、激しく憤慨しているわけであるが、これまでの議論との関連においてここで特に注意されるのが、「バイロンの所謂暴野なるルーソー、理想美の夢想家」というかたちで、バイロンの名が唐突に言及されていることである。

丁寧に見ていこう。まず、このバイロンのルソー評の引用は、『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌第七七節及び第七八節の中の一節を典拠としている。以下に、その第七七節及び第七八節を引く。

Here the self-torturing sophist, wild Rousseau,
The apostle of affliction, he who threw
Enchantment over passion, and from woe
Wrung overwhelming eloquence, first drew
The breath which made him wretched; yet he knew
How to make madness beautiful, and cast
O'er erring deeds and thoughts, a heavenly hue
Of words, like sunbeams, dazzling as they past
The eyes, which o'er them shed tears feelingly and fast.

His love was passion's essence—as a tree
On fire by lightning; with ethereal flame
Kindled he was, and blasted; for to be

Thus, and enamoured, were in him the same.
But his was not the love of living dame,
Nor of the dead who rise upon our dreams,
But of ideal beauty, which became
In him existence, and o'erflowing teems
Along his burning page, distempered though it seems.（*CPW*, vol.2, 105–106.）

ここに自己呵責の理論家、野蛮なるルソーがいる。
彼は苦悩の伝道者であり、激情に
魅惑の覆いを投げかけ、そして苦痛の中から
圧倒的な雄弁を搾り取った。彼はまず
生を得たのであったが、その生は彼を悲惨なものにした。だが彼は、
いかにして狂気を美しいものにするかということを知っていた。それで、
正しからぬ行為と思想に天上の色彩の言葉を投げかけたのであった。
その言葉は陽射しのように人々の前を過る時に彼らの目を眩ませ、
彼らに激情の涙を流させたのであった。

彼の愛は情熱の精華だった。まるで
雷に打たれて火につつまれた一本の木のようなものであった。天上の火によって

彼は燃え盛り、そして燃え尽きた。というのも、
こうなることと恍惚となることとは、彼にあって同じことであったからだ。
しかし、彼の愛は生身の女性を愛する愛ではなかった。
我々の夢に現れる死者を愛する愛でもなかった。
理想の美を愛する愛であった。それは、
彼の中では実在であり、彼の燃え上がるような頁に漲り溢れ出ている。
それは錯乱したもののように見えるけれども。

冒頭、見ての通り、第七七節第一行目に wild Rousseau という表現があり、「兆民居士安くにかある」の中の「バイロンの所謂暴野なるルーソー」という表現はこれをそのままなぞったものであることがわかる。また「理想美の夢想家」というのは、第七八節の第五行目から第七行目までの、理想的な美に対するルソーの偏愛について語った詩行を念頭に置いたものであろう。バイロンがここで描き出しているルソーとは、狂おしいまでに激しい内面感情と理想への意志とに身を焦がしているロマン主義者としてのルソーである。バイロンが右のルソー評の詩節を含む『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌を執筆した時期というのは、彼自身が結婚生活の破綻にまつわる様々な醜聞によってイギリスにいられなくなり、不遇をかこちつつスイスの地で大自然の美に慰めを見出していた時期であったわけだが、ここでバイロンがルソーについて歌っているのは、アルプスがルソー縁の地であるということ以上に、内面感情の激しさゆえに俗世間を嫌悪し、かつ俗世間から爪弾きにされたロマン主義的人間としてのルソーに、自身の境涯と相似たものを感じ、自己投影するところがあったからだと推察される。俗悪な人間社会を憎み美しい自然と純粋な理想とを愛したルソーの孤高と孤立を強調しつつ、ルソーの書簡体小説『新エロイーズ』*Julie ou la nouvelle Héloïse*（一七六一年）の清らかな

愛の世界に思いを馳せるバイロンの筆の運びには、内面感情の解放者としてのルソーの人格、即ちロマン主義の先駆者としてのルソーの人格に対する、バイロンのロマン派詩人らしい激しい共感が息づいていると言える。そしてそのようなバイロンのルソー熱に感化されたかのように、透谷も「兆民居士安くにかある」において、ただ「ルーソー遂に我邦に縁なくして」と書けば済むところを、わざわざバイロンの詩句を引用するかたちで「バイロンの所謂暴野なるルーソー、理想美の夢想家遂に我邦に縁なくして」と書くということをしているのである。[25]

このように透谷がわざわざバイロンのルソー評を持ち出すかたちでルソーに論及しているのは一体何故なのか。ここで透谷が参照しているバイロンのルソー讃頌の詩節の中にバイロン自身の反俗主義の声が響いているであろうことに思いを致すならば、透谷が「虚榮村の住民」執筆時と同様、バイロンのこの詩節の中に、アーノルドの所謂「俗物主義」を憎むバイロンの「卓越した誠実さと強さ」の表現、あるいはそれに裏打ちされたバイロンの高潔な「人格」の表現を見出し、例によって透谷がそれにいたく共感したからではないか、と推論することができるように思われる。そしてその共感の背後には、「虚榮村の住民」におけるバイロンの詩句の引用の中に自由民権運動をめぐる透谷の屈託が織り込まれていたのと同様、明治日本の政治状況に対する批判的な問題意識が激しく息づいていたと考えられる。ではその批判的な問題意識の内実は何か。透谷は「兆民居士安くにかある」において、「佛國思想は遂に其の根基を我邦土の上に打建つるに及ばざるか」というかたちで、明治日本の政治状況に対する懸念を表明しているわけだが、透谷のこの懸念は、要するに、ルソーの思想を含む「佛國思想」の「根基」、即ち最も大事な部分がいまだ紹介されていないということであった。透谷の批判的な問題意識はまさにこの点に向けられていたのである。

周知の通り、明治前期のルソー紹介の大立者として、ルソーの『社会契約論』*Du contrat social*（一七六二年）を『民約譯解』（明治一五年）と題し翻訳した兆民がいたわけであったが、平岡昇が指摘するように、兆民が捉えていたルソーは、人間の社会的開放を眼目として政治上の改革理論と民主主義思想を提唱する社会思想家・政治思想家としての

ルソーに限られていた。つまり『告白』*Les confessions*（一七七〇年）や『新エロイーズ』の著者であり自我意識と内面感情の解放者としてのルソーが兆民のルソー紹介からは抜け落ちていたわけである。[26]「佛國思想は遂に其の根基を我邦土の上に打建つるに及ばざるか」という透谷の懸念は、この事実と、透谷がわざわざバイロンのロマン主義的ルソー観に則って「バイロンの所謂暴野なるルーソー、理想美の夢想家遂に我邦に縁なくして」云々と書いていたこととを考え合わせれば、明治日本におけるそのようなルソー受容の偏りを念頭に置いたものであったと解釈することができるように思われる。恐らく透谷は、いまだ紹介されざる、内面感情や理想への意志を重視するロマン主義の先駆者としてのルソーの相貌に、「佛國思想」の「根基」を見、それがもっと明治日本の思想界に紹介されるべきだと考えていたのではなかったか。そしてそのような観点から、ルソーを十全に読みこなしたはずの兆民に、ルソーの社会思想の理論的な外形のみならず、その思想の要諦であるルソーのロマン主義的精神についても一般に紹介することを強く期待していたのではなかったか――。「兆民居士安くにかある」における「バイロンの所謂暴野なるルーソー」という言い方には、これだけの思いが込められていたように思われるわけである。

だが透谷にとって残念なことに、事態は透谷の期待通りには運ばなかった。透谷が期待をかけた当の兆民は、思想家として使命を放棄し一介の実業家に転身するというかたちで、透谷の期待を物の見事に裏切ってしまったわけである。透谷にとって兆民の北海道行きは、バイロンがその詩の中で歌い上げたようなルソー、即ち、理想と現実との間の亀裂に耐えつつ、現実世界に対して苦悩と狂気の言葉を吐き続けたルソーが歩んだ思想家としての道の放棄と映じたに違いない。吉田精一が言うように、透谷はそれまで「兆民を「理想美の夢想家」ルソオとほとんど同視して」[27]いたわけであったが、思想界を去ってゆく兆民は、透谷にとって最早〈東洋のルソー〉ではなくなってしまったのであった。このように見てくると、「バイロンの所謂暴野なるルーソー、理想美の夢想家遂に我邦に縁なくして」云々という文言は、バイロンがルソーに対して投げかけていたのと同じような共感的な眼差しを、透谷自身、〈東洋のルソー〉たるべき兆

民に対して投げかけることができなくなったことへの激しい失望を表明したものと解釈することができるのである。

実はバイロンは、先に引用した詩節に続く、『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌第八一節及び第八二節において、フランスにおけるルソー思想の運命について、おおよそ次のような内容のことを歌っている。ルソーの理想への高邁な意志は、鬱屈の度を強め、狂気にまで高潮し、それが大衆を扇動して、結果全てを転覆させるフランス革命を起こした。だが、ルソーによって覚醒したフランス国民の「野心が利己的なものであったために」(because ambition was self-will'd.)、いざ権力を掌握すると、見る見るうちに当初ルソーの掲げていた理想とは全く逆の方向、即ち、他者の自由を圧殺する恐怖政治へと堕落していったのである――。そうなのだ、われわれはここにもバイロンによる世俗的権力意志に対する批判という馴染みの旋律を聴くことができるのである。バイロンはここでも、フランス革命以降の政治史の顛末を見据えながら、俗情と結託した権力意志の堕落について歌っていたのであり、つまりアーノルドが、これらの詩節こそ「卓越した誠実さと強さ」を核とするバイロンの高潔な「人格」が表現された箇所と見なしたに違いない詩節が、まさにこのくだりなのであった。透谷がこのくだりまで読んでいたかどうかについては、それを裏付ける客観的資料がないため明らかにすることはできないが、自身が参照した詩節の直ぐ後にくる詩節なので読んでいた可能性は高いと言えよう。そしてもし読んでいたとしたら、「虚榮村の住民」におけるバイロンへの論及以来の馴染みのモチーフに鋭敏に反応し、内心で政治熱の火とバイロン熱の火とをともども掻き立てながら、堕落せる明治日本の政治の現場に、俗情と結託して堕落してしまう前のルソー思想を高邁なまま、純粋なままに根付かせることの意義をますます強く確信したに違いない。

このように、バイロンの政治的な面に対する透谷の関心は、例えば長澤別天等が関心を向けていたような政治的自由主義の理念の実践的行動者としての面[28]というより、アーノルドによって示唆されたような、ヨーロッパ政治の動向に透徹した批評的な眼差しを投げかける、言わば警世の士としての面にその力点が置かれていたということがわかってく

る。[29] しかも、このようなバイロンの政治的な眼差しへの関心は、ただ単に遠いヨーロッパの政治を見る見方をバイロンから学ぶといった安直なものではなく、透谷自身が生きている同時代の明治日本の政治状況をめぐる強い問題意識に支えられたものなのであった。透谷は、バイロンが個人及び国家を堕落に導く世俗的権力意志を批判的に見る眼差しを、自由民権運動の直接的な担い手であった壮士たちに対して、また、それにかつて関与していた自身に対して鋭く向けながら、バイロンの政治的な詩句や詩行を、明治日本の政治状況を考える上で有効な批評として積極的に受け止めようとしていたと考えられるのである。つまり、バイロンの政治的な眼差しに自らの眼差しを重ねることは、透谷にあって、明治日本の政治状況を批評的に見据えることであると同時に、自身の政治への関心の根源を見つめ直す自己批評の試みでもあったのであった。そしてその試みは、自由民権運動から距離を置いて以来、民権壮士批判と自己批判とを通して厄殺しおおせたと思われた、政治的関心としての政治熱を内奥から呼び覚ますこととなり、そしてそれがバイロン熱と結びつく中で、一個の批評精神としての〈政治的バイロン熱〉を透谷の内部で醸成することとなったのである。こうして透谷は、自由主義の精神が世俗的権力意志に変質した時いかに堕落するか、ということを見据えるバイロンの批評的な眼差しを自家薬籠中のものとしつつ、明治日本の自由主義精神の行く末を案じる文学者として、日本におけるバイロン受容の歴史においても独特の位置を占めることとなったのである。

おわりに

ここまで、透谷が「虚榮村の住民」及び「兆民居士安くにかある」におけるバイロンへの論及を通して仄めかしていたものが、批評的警世家としてのバイロン像という独特なものであったということを論じてきたわけだが、ではこのよ

うなバイロン像と、これまで透谷において主流を占めるとされてきた、厭世的自我詩人としてのバイロン像とは、透谷の内部でどのように折り合いがつけられていたのであろうか。最後にこの点について論じて稿を閉じたい。

透谷が「マンフレッド及びフオースト」や「厭世詩家と女性」などにおいて描き出していた厭世的自我詩人としてのバイロン像とは、一言で言えば、理想と現実の間に横たわる深淵を前に自己の内面の負の感情を内攻させてゆく詩人といったものであった。このような厭世的・内向的バイロンに対する関心は、「虚榮村の住民」及び「兆民居士安くにかある」において示唆された、自己の外部の政治状況に冷静な批評を試みる政治的・外向的バイロンへの関心と、一見したところその方向性において正反対のもののように思われる。

だが、バイロンに対するこれら二つのかたちの透谷の関心のありようは、実はそれほど互いに異質なものではなかった。何故なら、政治的批評意識の強い警世の士としての政治的・外向的バイロンの「人格」に対する透谷の関心は、本来は高邁な自由主義の精神を世俗的権力意志へと堕落させてしまう俗情一般に対して根深い嫌悪を向けるバイロンへの肯定評価に基づくものであり、このような透谷のバイロンに対する関心のあり方は、「想世界」の純粋を愛するが故に「實世界」の卑俗を厭う厭世的・内向的バイロンの「人格」への関心のあり方と、バイロンにおける俗物主義への嫌悪を正しく見据えたものという意味で、実は同質のものと言うことができるからである。違いと言えば、厭世的・内向的バイロンへの関心が、バイロンにおける、卑俗さを激しく嫌悪する際の内面感情の鬱屈という内向のヴェクトルに焦点を当てているのに対し、政治的・外向的バイロンへの関心の方は、卑俗への嫌悪を卑俗な外部世界に対する反発として表現する外向のヴェクトルを強調しているという違いに過ぎなかった。透谷の示唆した二つのバイロン像は、透谷内部のバイロン観の分裂に起因するものではなかったのである。

では透谷が想定するバイロンの本質とは一体何であったのか――。それは、ある時は自己の内面世界を陰々とした眼差しで見つめ、ある時は外部世界を傲然と眺めその卑俗さを弾劾するという、バイロンの誇り高い活動的な精神性で

あった、と言うことができるように思われる。思うに、透谷にとって重要であったのは、バイロンの厭世的な面と政治的な面との両方に一貫する、自己と世界を見据える眼差しの強度であった。恐らく透谷は、内向性（＝自己の内部への眼差し）と外向性（＝自己の外部への眼差し）の両極で自在に伸縮するダイナミックな自我のありように、バイロンの本質を見た。透谷のこのような見方は、大きくはアーノルドのバイロン観から示唆されたものであったと考えられるが、それが単なる借り物に終わらず、直接的政治活動としての自由民権運動への参加とそこからの離脱、そしてそれ以後の厭世的気分への沈降と文学への接近、という透谷固有の体験と実感に裏打ちされて、透谷自身のものによく消化されていると言える。

明治前半期のバイロン言説の大きな流れは、政治的・外向的バイロンから厭世的・内向的バイロンへと、論者の関心が移っていた過程として捉えられるわけだが[30]、そのような流れの中で、政治的・外向的バイロンと厭世的・内向的バイロンとを結ぶものを捉え、統一的なバイロン像を描こうとする試みはなかなかなされてはこなかった。そのような中で、政治的・外向的バイロンと厭世的・内向的バイロンとを結ぶものとしてのバイロンの「人格」の内実を、アーノルドの示唆を受けつつ自分なりに見据えていた透谷の眼差しの先には、恐らく統一的なバイロン像がおぼろげながら像を結んでいたのではないか、と推察される。だが、その透谷とて、自身の文章の中で自分なりの統一的バイロン像を十全に描き出すには至らなかった。しかも透谷が実際に描き出したバイロン像で一般に流通したのは、やはり厭世的・内向的バイロン像の流れに棹差した「厭世詩家」＝厭世的自我詩人としてのバイロン像の方であり、もう一方の警世の士としての政治的・外向的バイロン像については、「虚榮村の住民」及び「兆民居士安くにかある」におけるバイロンへの論及があまりに断片的であったが故に、そのごくわずかな片鱗が仄めかされたに止まったのである。

透谷は、自らの統一的バイロン像の輪郭を描き出す試みを全くしなかったのだろうか。透谷のバイロンへの論及を丁寧に追ってゆくと、透谷はわずかだがそれをなそうとした気配がある。それはまず、「富嶽の詩神を思ふ」（『文學界』

第一號、明治二六年一月）におけるバイロンへの論及に看取することができる。この文章は、一言で言ってしまえば、口先だけで愛国的言辞を喋々することを退け、真の愛国心とは何かという問題についての透谷なりの見解を提示しようとした美文調の文章である。この文章の論旨それ自体は、真の愛国とはその国の詩的精神の源である不朽不滅の自然に思いを馳せる心を持つことであり、我が国においてその自然とは富士であるから、富士を愛した人麻呂や赤人、西行や芭蕉などの日本の詩人たちこそ真の愛国者である、といった程度のものである。また文章も少々修辞の勝ちすぎた、所々論理のつながりの不明瞭なものであり、透谷自身も自覚していた通り、[31] 公平に見てこれはあまり意味深い文章とは言えないものであった。透谷がこの文章で言わんとしていたことをあえて言葉を補いつつ汲み取るならば、真の愛国にはその国の国柄やその国の自然に対する感受性の裏打ちが不可欠であり、そういった美的感受性や美的情操の豊かな文学者こそ真の愛国者たり得る、ということであったのだろう。そしてまさにこのような文脈において、透谷は自身が内心で思い描いていた統一的バイロン像を次のような言い方で示そうとするのである。

> 故郷は之れ邦家なり、多情多思の人の尤も邦家を愛するは何人か之を疑はむ。孤劍提げ來りて以太利の義軍に投じ一命を悪疫に委したるバイロン我れ之を愛す。（一一二頁）

ここで透谷は、「多情多思の人」こそが「尤も邦家（＝国家）を愛する」という命題の正しさを示す有力な一例として、晩年に政治的行動を起こしたバイロンを挙げるということをしている。この「多情多思の人」の中には、当然理想と現実との狭間で厭世感情を募らせる厭世的自我詩人も含まれると考えられるわけであるから、透谷がここで言わんとしていることは、バイロンは「多情多思」の「厭世詩家」であったからこそ真の政治的愛国者たり得たのだ、といったことなのであろう。厭世感情と愛国心は共に豊かな感受性を前提とするものだから、結局両者とも同じ「多情多思」に

帰するものであり、その意味で言えば厭世的・内向的バイロン像と政治的・外向的バイロン像は矛盾しないどころか、実は同根であるとすら言えるのだ――。恐らく透谷はこのように言わんとしているのである。[32]

だが、透谷のこのような舌足らずな言い方による統一的バイロン像の提示は、全く説得力の乏しいものであったと言わざるを得ない。先に述べたように、「富嶽の詩神を思ふ」という文章全体があまり論理の明晰な文章ではなく、「多情多思」が即愛国心に直結するという論理についての説明も不十分なものだということも確かにあるが、それ以上にバイロンに関する論及自体がかなり奇妙奇天烈な文と言わざるを得ない代物なのであった。この短いバイロンへの論及の中に複数の事実誤認があるのである。例えば、バイロンが「一命を惡疫に委したる」のは「以太利の義軍に投じ」た際のことではなく、ギリシャ独立戦争に参加した際のことである。[33] またバイロンの実際の「故郷」即ち「邦家」はイギリスであり、「以太利」における政治的行動とバイロンの愛国心とは直接的には結びつかない。透谷はこのような誤謬と矛盾の文を書きつけてまで、厭世的・内向的バイロン像と政治的・外向的バイロン像とを、言わば「多情多思」の愛国的自我詩人という像にまとめ上げたかったのかもしれないのだが、実際ここで提示されているバイロン像はほとんど意味を成さないほどお粗末なものであった。

このことは、「國民と思想」（『評論』第八號、明治二六年七月）におけるバイロンへの論及についても同様に指摘することができる。この評論においても透谷は、詩人の愛国心を論じる文脈で「バイロンは如何にその故國を罵るとも、英國の一民たるに於ては終始變るところなく深く之を其の著作の上に印せり」云々と言い、「多情多思」の愛国的自我詩人としてのバイロン像を定着させようと腐心している。この一文なども、バイロンにおける、「故國を罵る」というところに表れた厭世的な面と、「英國の一民たる」ことを「著作の上に印」しているという（〈国〉との関わりが深いという意味での）政治的な面とを連結させようとする透谷の努力を表したものと言えるわけであるが、やはり、それらがどのようなかたちで連結しているのかについて具体的に示すには至っていないために、実体のない空言に終わってし

まっている。

このような透谷における統一的バイロン像への拘りは、恐らく、表面的には政治から文学へという軌跡を描いたに見える透谷が、やはり最後まで政治的な問題意識・関心を捨て切れず、〈政治―文学〉の間で揺れる自身の心の動揺を、〈政治―文学〉の両方に跨った人生を送ることのできた詩人戦士バイロンの精神性を探究することで解決しようとしていたことを示唆するものである。ただ透谷は、直接行動に赴く政治的人間であることを自由民権運動から離脱して以降やめており、各種の文章を書いていた明治二十年代半ばの時点においては内面性や思想性を第一に考える文学的人間であったので、バイロンにおける文学性（＝厭世的内向性）と政治性（＝政治的外向性）の統一の試みが内面性や思想性の軸の方に傾くかたちでなされることになったのは否めない事実であった。[34] 透谷がバイロンの政治的行動それ自体についてよりも、バイロンの政治を見据える眼差しや政治に赴く動機づけの問題について論じようとしたのも、そういった透谷の個人的な事情を反映してのことであったと思われる。

もし透谷によって厭世的・内向的バイロン像と政治的・外向的バイロン像との統一化がなされていたとしたら、その後の日本におけるバイロン言説にも大きな影響力を持ったのみならず、以後幾度か繰り返されることになる〈政治と文学〉論争にも有効な視点を提供するものになり得たかもしれない。だが、透谷はそれを十分なし得ないまま、明治二七年五月、足早にこの世を去った。透谷の思想的・文学的・政治的営為全体がそうであったように、統一的バイロン像を日本人の手で主体的に描き出すという試みは生煮えのまま放置されることとなったのである。

注

（1）「負のロマン主義」という批評用語は、M・ペッカムがバイロン流のロマン主義のあり方について説明するために用意したものである。ペッカムによれば、「端的に言って、「負のロマン主義」は、静的な機械論的世界観から離れたものの、いまだ動的な有機的世界観の文脈において自分の思想や藝術を再統合するまでには至っていない、そういう人間の姿勢、感情、思考の表現形態である」。「気質や感情的・知的な深さに応じて、様々な人間が、静的な機械的世界観の文脈で宇宙の意味を確信している状態から、動的な有機的世界観の意味を確信している状態に移行してゆくにつれて、彼らは、懐疑と、絶望と、宗教的及び社会的疎外感と、理性と創造力の乖離の状態の時代に足を踏み入れてしまう。その時代においては、彼らは、いかなる宇宙の美も善も、いかなる意義も、いかなる合理性も、もっと言えばいかなる秩序も、邪悪なる秩序でさえも、全く認めないのである。こういう状態が、「負のロマン主義」、即ち「正のロマン主義」の前段階であり、疾風怒濤の時代ということになるのである」。See Morse Peckham, *The Triumph of Romanticism* (Columbia: University of South Carolina Press, 1970) 16, 21–22.

（2）『蓬莱曲』における『マンフレッド』受容の問題について論じた先行研究は枚挙にいとまがないが、ここでは取りあえず特に精緻な議論を展開したものとして、小川和夫「『蓬莱曲』と『マンフレッド』」（『東洋大学大学院紀要』第一四号、昭和五三年二月、小川『明治文学と近代自我――比較文学的考察』、南雲堂、昭和五七年所収）を挙げておく。また、透谷の評論作品における『マンフレッド』受容の問題については、拙稿「芭蕉とバイロンをつなぐもの――北村透谷の「自然―詩人」観」（『比較文學研究』第八六巻、平成一七年一一月）、及び拙稿「発心するマンフレッド、悔改める文覚――北村透谷の「心機妙變」観」（『比較文学』第四八巻、平成一八年三月）を参照されたい。

（3）この固定化のプロセスについては、拙稿「明治前半期における厭世的バイロン熱の内攻過程――北村透谷「厭世詩家と女性」まで」（『緑聖文化』第一一号、平成二五年三月）を参照のこと。

（4）このバイロンの政治的な面に対する明治初期の日本の言論人の意識のありようについては、拙稿「明治前半期における政治的バイロン熱の運命――長澤別天を中心に」（『緑聖文化』第一〇号、平成二四年三月）を参照されたい。

（5）笹渕友一は、戸川秋骨の「透谷君と語る時は、文学の話よりも宗教の話が多く出、またそれよりも政治に関する話が多分にあつた」（「四十年前の文学界」）という証言や、巌本善治の「透谷は若し文学に専念せざりしならば社会改革家として政治方面に活動したであらうと思はれる人格でした」（「満州からの通信」）という証言を引きながら、透谷の自由民権熱以来の政治的関心が生涯にわたったという見解を披露している。笹渕『「文學界」とその時代』上巻（明治書院、昭和三四年）、九五頁参照。

（6）同書、三二一―三二四頁参照。

（7）吉武好孝「概観――英米作家の導入と日本思想の近代化」［福田光治他（編）『欧米作家と日本近代文学』第一巻〈英米編一〉（教育出版センター、昭和四九年）、二二―二五頁参照］。

（8）吉武好孝「北村透谷の翻案作品」［『近代文学の中の西欧――近代日本翻案史』〈比較文学研究叢書①〉（教育出版センター、昭和四九年）、一四一頁参照］。

（9）佐藤善也「「楚囚之詩」の成立について」（『国語と国文学』第三五巻第二号、昭和三三年二月）参照。

（10）以下、透谷の文章の引用は、断りのない限り、初出の表記の保存に努めた『北村透谷集』〈明治文學全集二九〉（筑摩書房、昭和五一年）に拠り、本文中に頁番号のみ記す。なお、ルビ、圏点、傍点その他は、必要のない限り省略した。

（11）雑誌『平和』については、勝本清一郎「日本平和主義運動の黎明」（『日本評論』、昭和二三年二月、後に勝本『近代文学ノート2』（みすず書房、昭和五四年）に収録）、黒木章「『平和』をつくる人々――フレンド派の人々を中心にみるその前史」［桶谷秀昭他（編）『透谷と近代日本』（翰林書房、平成六年）］を参照した。

（12）笹渕友一も、『平和』所載の透谷の文章の中で、『平和』を発行する日本平和会の平和運動の趣旨に沿った文章は、せいぜい『平和』第三號掲載分くらいのもので、後は平和運動とは直接的に関係ない、人間論や宗教論や文学論ばかりであることを指摘している。笹渕前掲書（上）、六一―六二頁参照。

（13）当該箇所の原文を以下に引用する。『マンフレッド』第一幕第一場におけるマンフレッドの冒頭の独白の中の台詞である。

But grief should be the instructor of the wise;
Sorrow is knowledge: they who know the most
Must mourn the deepest o'er the fatal truth,
The Tree of Knowledge is not that of Life.

しかし、悲嘆は賢者に教える者でなければならぬ。
悲しみこそは知識である。誰よりも多く知る者は
宿命としての真実のことを誰よりも深く嘆かねばならぬ。
「智慧の樹」は「生命の樹」ではないのだ。（拙訳）

(14) バイロンの詩からの引用は、断りのない限り、Lord Byron, *The Complete Poetical Works*, 7vols. ed. Jerome J. McGann (Oxford; Tokyo: Clarendon Press, 1980–1993) に拠り、本文中に *CPW* の略号とともに巻号と頁番号を記す。また、バイロン詩の訳は、断りのない限り、全て拙訳による。

(15) 十州山人「バイロン卿」（『この花草紙』第二巻、明治二六年六月）、二三頁。

(16) アーノルドの「バイロン論」からの引用は、全て Matthew Arnold, *The Complete Prose Works of Matthew Arnold*, vol.9 [English Literature And Irish Politics.] ed. R. H. Super (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1973) に拠る。以下、本文中に頁番号のみ略記する。

(17) 笹渕前掲書（上）、八〇頁参照。

(18) 佐藤（善）『透谷、操山とマシュー・アーノルド』（近代文芸社、平成九年）、九頁参照。

(19) 同書、九―一一頁参照

(20) 同書、六五―六六頁参照。

(21) この点については、前掲拙稿「明治前半期における厭世的バイロン熱の内攻過程――北村透谷「厭世詩家と女性」まで」を参照のこと。

(22) この意味で、磯田光一が、透谷のバイロン理解から「バイロンの政治性もダンディズムも捨象され、厭世だけが透谷とバイロンとを結ぶ絆になった」としていることには、疑問を呈せざるを得ない。磯田は、「貴族文明が市民民主主義に移行する時代を生きたバイロンは、貴族主義の形骸化を呪うと同時に新文明の俗悪さを呪ったが、その厭世は憂愁として表現されるとともに、自己武装としてはダンディズムとなってあらわれた」と論じている。磯田「バイロンと近代日本（上）」（『磁場』第七号、昭和五一年一月）、二四―二六頁参照。磯田はこのように「反逆児バイロン」「正義派バイロン」の人間像を描き出しているわけだが、このバイロン像は、アーノルド的バイロン像、即ち、「卓越した誠実さと強さ」の持ち主であり、俗物主義を嫌悪する高潔な「人格」であるというバイロン像にほぼ等しいものである。透谷はアーノルド的バイロン像から政治的な見方を学習した可能性が高い、というのが筆者の見解であり、「ダンディズム」はともかく「バイロンの政治性」が透谷のバイロン理解から「捨象」された、という磯田の見解は当を失していると考える。

(23) 勝本清一郎も、明治二一年一月二一日付ミナ宛書簡の中の、俗情と結託した権力意志批判の言辞などに触れつつ、そこに、物質的繁栄のみを追求する明治日本の資本主義社会に対する、透谷の内面的視点からの社会批評の原点を見出そうとしている。勝本前掲書、四一―四六頁参照。

(24) 笹渕友一は、透谷の自由民権熱の二本の柱として、ルソー流の天賦人権論と志士気質とを挙げている。この笹渕の所謂「志士気質」とは、政治的行動の背後にある自己犠牲的な情念のことを意味していると解釈でき、筆者もこの笹渕の見解に賛成である。笹渕前掲書（上）、九六―九八頁参照。だが、笹渕が「透谷の志士気質は彼の自由民権思想を「経国の志」にまで抽象化し、思想的輪郭をぼかしてゐる」と断じていることには、一定の留保をつけたい。透谷が「志士気質」から政治の背後にある情念の問題に自覚的であり、そのような自覚を基に、ヨーロッパ政治史における自由主義の堕落を歌ったバイロンの詩句に接近し得たことを重視すると、寧ろ、人間の情念の問題を軽視し合理主義的に世界を解釈し過ぎているかの如きヨーロッパの自由主義的社会思想の陥穽を、透谷が精確に見抜いていたと見ることも可能ではないか、と考えるからである。

(25) 透谷がわざわざバイロンによるルソー評を引用したことについては、もう一つ別の理由も考えられる。兆民は、『革命前法朗西二世記事』（明治一九年）において「英吉利ニ在リテハロールドビロン、皆ルーソーノ詞藻ヲ祖述シ咀嚼脱化シテ別ニ一家ヲ成スコトヲ得タリ」と書いている。つまり兆民は、バイロンがルソーに親炙していた事実を知っていたわけである。

もしかしたら透谷は、兆民のこの文章から、兆民が『チャイルド・ハロルドの巡礼』第三歌の中のバイロンによるルソー讃頌を読んでいる、と思い込んだのかもしれない。そして、ロマン主義の先駆者としてルソーを見る見方を兆民と共有すべく、兆民に直接呼びかけるようなかたちで、兆民もよく知っているであろう、バイロンのルソー讃頌の詩節からの引用を行なったのではないか。ただしこれはあくまで推測の域を出ない。

(26) 平岡昇「日本におけるルソー――その文学的影響について」[『平岡昇プロポⅡ』(白水社、昭和五七年)、四二六―四三一頁参照]。この点については、浜田泉も指摘するところである。浜田「北村透谷・ノート」[『ロマン主義文学の水脈』(緑地社、平成九年)、二〇六頁参照]。

(27) 吉田精一「ルソーと日本の近代文学」(『現代思想』〈特集ルソー甦える狂気の聖者〉第二巻第五号、昭和四九年五月)、九三頁。

(28) 長澤別天の政治的バイロン熱については、前掲拙稿「明治前半期における政治的バイロン熱の運命――長澤別天を中心に」を参照のこと。

(29) この点について笹渕友一も、明治二三年時の透谷の評論文に触れつつ、透谷が「(当時の国会開設、地方制度改革、新劇場建設といった)社会の表面的現象に幻惑されないで、その根本問題を剔抉しうる具眼の士」を待望していたことを指摘している。笹渕前掲書(上)、一〇八頁。透谷の「具眼の士」待望論は明治二三年以降も持続し、それが警世の士としてバイロンを見るバイロン観の形成の基礎ともなったと推察される。

(30) この点についての具体的な議論については前掲の二つの拙稿を参照されたい。

(31) 透谷夫人のミナによる談話「『春』と透谷」(『早稲田文學』第三一號、明治四一年七月)には、「富嶽の詩神を思ふ」の意外な好評を前にした時の透谷の言葉として、「こんな花やかなものを書きさへすれば歡迎する、かう云ふ世の中だからいやだ、おれはこんなものを書くのが本領ではない」という憤慨の言葉がミナによって証言されている。『北村透谷集』、三二三頁参照。

(32) 笹渕友一は、この「富嶽の詩神を思ふ」におけるバイロンへの論及を引きつつ、「透谷のバイロンへの傾倒が詩人、芸術家としてよりも実行の人、自由の戦士としてのバイロンに焦点を合はせてゐた」と論じている。笹渕前掲書(上)、三一三頁。だが、以上論じてきた理由から、この笹渕の見解には筆者は賛同することはできない。筆者は、「富嶽の詩神を思ふ」にお

けるバイロンへの論及の中にこそ、「詩人、芸術家として」の厭世的・内向的バイロン像と、「実行の人、自由の戦士として」の政治的・外向的バイロン像とを何とか統一しようとしていた透谷の腐心を見るのである。また本間久雄は、やはりこの「富嶽の詩神を思ふ」におけるバイロンへの論及に触れつつ、そこに透谷の、「豪宕不羈」「偶像破壊者」「所謂時代的憂欝の兒」としてのバイロンへの愛を読み取り、やや漠然としたかたちではあるが、厭世的・内向的バイロンと政治的・外向的バイロンの両方に相渉る透谷の関心の表現を見て取っている。本間「透谷とバイロン――英國浪漫派とわが明治文壇」[早稲田大学欧羅巴文学研究会（編）『浪漫思潮――発生的研究』（三省堂、昭和六年二月）、二三八頁]。

(33) 笹渕前掲書（上）、七六―七七頁参照。

(34) この透谷における内面性・思想性への傾斜の問題について、勝本清一郎は、「（透谷は）内面的事業を外形的事業で裏づけて、しかもなお一層前者の内面性を生かしてゆく構造を探る方向へと向わなかった」として、透谷における「内面の人と外面の人とが結合し得る精神構造」の欠如を見て取っている。勝本前掲書、二八頁参照。透谷の統一的バイロン像の模索の試みとその失敗は、確かに勝本の所謂「内面の人と外面の人とが結合し得る精神構造」の透谷における欠如を物語るものと言うことができるであろう。だが、勝本文は、やや透谷の「内面の人」としての側面を強調し過ぎているきらいがあるように思われる。透谷が「外面の人」であるより「内面の人」であったことは確かに間違いないことであるが、多情多恨の愛国的自我詩人という自身のバイロン像を、「外形的事業」にも相渉った「内面の人」、且つ「内面的事業」にも相渉った「外面の人」として思い描こうとしていたわけであり、その意味で、透谷は「内面の人」と「外面の人」とが相互乗り入れする地点に理想的な人間像を想定しようとはしていたと考えられるわけである。